

最終章

マダ見ヌ世界へ

【春草／明治エンド】

見上げれば、赤い月。夜空にぼつかりと、まあるい穴が覗いている。どこをどう歩いたのか……。喧噪が聞こえる。その方向へと、私はゆっくりと歩を進めた。

「あれ……？」

そうだ、私は日比谷公園にやって来たんだ。今夜は満月だから。でも足を運んだその場所は、いつもの雰囲気とはまったく違う。奥には神社まであるようだった。頭上にはかわいい提灯が連なり、その下にずらりと並ぶ屋台。子供たちがはしゃいでいる。調子はずれな音楽に、道端で芸を披露する大道芸人たち。……どうやら今日は、縁日だったらしい。思わぬ人混みの中で、私はきよろきよろと周囲を見回した。

（チャーリーさんはどこにいるんだろ）

またいつものようにふらりと現れるとは思っただけだ。

「やあ、芽衣ちゃん」

案の定、チャーリーさんはどこからともなく現れた。

「いやあ、会えてよかったよ。探しても探しても見つからないから、そろそろ帰ろうかと思っていたところなんだ」

「……勝手に帰られたら困るんだけど」

（危なかった！）

得体の知れないこの人のことだから、約束を反故にされたって不思議じゃない。

「今日がお祭りだったなんて知らなかった」

「満月の夜はね、生き物の血が沸き立つのさ。じっとしてはいられなくなる。そして…」

彼は目を細め、大きく腕を広げた。

「少し不思議なことが起こりやすくなるんだ。僕の奇術が時空の壁を壊し、君をこの時代に運んだようにね」

「その壁、ちゃんと直しといたほうがいいと思うけど……」

これ以上犠牲者を増やさないために、と私はつけ加えた。

「はは、でも楽しかったろう？」

（人の気も知らないで）

気楽そうに話す奇術師に、少し腹が立った。楽しいとか観光気分ですべてほしくない。

「君はこの時代でさまざまな人々と出会った。そして、離れがたいほど、大切な存在だと思える人にも出会ったんじゃないかな？」

なんだか悔しくなって、私はそっぽを向いた。

「……さて、あいさつはこれぐらいにしておいて、と」

居住まいを正し、チャーリーさんは私に向き合った。

「その人は、君にとって大事な人なのかな？」

「さあ、よく考えて。これは大切な質問だよ？ 君にとってその人は、現代での生活よりも大切なものなのかな？」

「それは……。……。よくわからない」

実はまだ迷ってる。現代に帰らなきゃ……。と思いつつも、この時代に心残りがあるのもたしかだ。

「……。へえ？ あんなに帰りたいたっていったのに？」

そう、私はつい最近まで、自分が現代に帰ることを選ぶと信じて疑わなかった。

（でも、どうして……。帰らなきゃいけないと思うんだろ？）

家族や友達が待っているから？

生まれ育った世界だから？

すべてを捨てるのは無責任だから――？

（じゃあ、私を好きになってくれたあの人を置いて帰ることも、無責任なんじゃないの？）

私がいなくなったら、あの人はどう思うんだろう。

私がないこの世界で、私のことを探し回ったりするのかもしれない。

まさか私が違う時代に帰ったとは思わないだろうから。

（――そんなことさせたくない）

私を必要としてくれるなら、そばにいたい。

「誰か、大切な人ができた？」

私はうなづいた。まぶたの裏が熱くなる。

「その人と離れたくないんだね」

もう1度、うなづいた。

たったそれだけの理由で私はここから動けずにいる。私がもう少し大人なら、きっとこんな気持ちに振り回されたりしないのかもしれない。

「それなら、離れなければいいよ」

チャーリーさんは難なく答えた。

「離れたくなければ、離れなければいい。おそらくその人も君と同じことを思っているはずだ」

「……そんなのわからない。簡単に言わないで」

「いいや、簡単な話さ」

「どんなに大がかりなマジックでも、タネあかしをしてみれば仕掛けなんて拍子抜けするほど簡単なものなんだよ」

「……？」

説得力があるような、ないような。よくわからないたとえだった。

「信じられない？　じゃあ、これからすごいマジックを見せてあげよう」

「え？」

「芽衣ちゃんだけの特別サービスだ。今から、ここに君の大切な人が現れるからね」

「なに言ってるの」

そんなはずない。

現れるわけがない。

「心配しなくても大丈夫だよ。明治だろうが現代だろうが、どこにいたって彼は君のこ
とを大切にしてくれるはずだから」

「チャーリーさんっ」

だんだんと喧噪が遠のいていく。人々の笑い声も、風が木々を揺らす音も。

*

——赤い月だけが、暗闇を照らし出す。

（チャーリーさん）

私は何度も呼びかけた。

（教えて。あなたは誰なの？）

その問いに答える代わりに、彼はニヤリと道化師のような笑顔を浮かべた。

「幸せになるんだよ、芽衣ちゃん」
ぱちんと、大きく指を鳴らした。

*

「……ねえ」

ぐらり、ぐらりと身体が揺れる。

まるで水の中を漂っているかのような感覚。

「いつまで寝てるの。今夜は君の大好きなビフテキだよ」

——ビフテキ？

その単語が、私を勢いよく現実へと引き戻した。

「っ!？」

まぶたを開け、飛び起きる。

「え……ここは……?」

サーモンピンクの壁紙に大きな格子窓。

飴色に光るキャビネットと鏡台。

ベッドの上にいる私。

「なに寝ぼけてるの。君の部屋だろ」

そして――ベッドの脇に立つ、春草さんがいた。

「あれ？ お祭りは？」

私は今さっきまで、日比谷公園のお祭り会場にいたはずだ。なのにどういわけか、気がついたら鷗外さんの屋敷に戻っている。

「祭り？ ……君って、夢の中でもおめでたいんだね」

「違うんです、私、さっきまで本当にお祭りに」

（あ……）

窓の外に浮かぶ月を見て、私は息を呑んだ。

（月が、欠けてる）

今さっきまで満ちていたはずの月が、ほんの少しではあるけど丸みを失っている。

「チャーリーさんは……」

どこに行ってしまったんだろう。

もうなにがなんだかわからない。

ただ1つはっきりしているのは、すでに満月の夜は過ぎてしまったということ。

（じゃあ、私はもう――）

「チャーリーって、誰」

ぐいっと、春草さんが身を乗り出してくる。

「君の家族かなにか？」

「いえ、家族じゃなくて」

友達と呼べるほど気安い関係でもないし、第一、私は彼のことをなにも知らなかった。なんとも説明しづらくて口ごもっていると、春草さんはさらに冷たい目つきで私の手を握む。

「それとも、口には出せないような関係、とか？」

そんなわけない、と私は首を振る。

でも春草さんのまなざしは、疑いの色を濃くするばかり。

「へえ。夢にまで見るような相手が、君にはいるわけだ」

「違いますってばっ」

「ふうん……まあいいけど」

ちっともよさそうじゃない顔で春草さんは私の手を放し、ドアのほうへと歩いて行く。

「夕餉の時間だよ。早く来れば」

「はい……」

（絶対、怒ってる……）

「どうだ、おいしいかい？ 子リスちゃん」

私の目の前には立派なステーキが置かれている。

牛鍋とはまた違う、分厚い肉のかたまりだ。口の中で溢れんばかりの肉汁を堪能し、全身がとろけてしまいそうな幸福感に包まれる。

「さ……最高です」

「ははっ、それはよかった。奮発した甲斐があったというものだよ」

鷗外さんは嬉しそうに笑う。

「ふむ、フォークとナイフの使い方も達者ではないか。ちまたでは、使いかたもわからず口の中を血だらけにする輩もめずらしくないというのになあ」

（血だらけ……）

なにげなく使っていたフォークとナイフだけどここの時代ではまだまだ一般的ではないのかもしれない。

とくにナイフは、慣れなければただの凶器だ。

「そうだ春草、河本女医に会ってきたのだろうか？」

「はい」

「どうだったのだ」

「おそらく……網膜症もうまくしょうではないか、と」

(網膜症?)

会話の流れから察するに、どうやら春草さんはお医者様のところに行ったようだ。自
主的に受診してくれたのは嬉しいけど、その症状が気にかかる。

「網膜症か……。完治の見込みは？」

「すぐに治るわけではないと聞いています」

軽い言葉ではないのに、あっさりと、春草さんはそう言った。

「ですが、時間をかけて療養すれば回復する見込みはあるとの話でした」

「本当ですかっ？」

つい大きな声を出して立ち上がってしまった私を、春草さんはじろりと見上げる。

「……騒がしい奴」

「だって……」

私には、この時代の医学がどれだけ進んでいるのかわからない。

でも治る見込みがあり、春草さんが絵を続けられる可能性があるとわかっただけで、
飛び上がりそうなほど嬉しかった。

「こら春草。彼女が心配しているというのにその態度はなんだ。まったく、おまえという
男はやはりまだまだ子どもだなあ」

鷗外さんはあきれたように肩をすくめてから、なぜか私の手を取った。

「いつまでもそんな調子でいると、どこからともなく紳士が現れて彼女をかつさらってしまうかもしれない。……たとえば僕のような」

「っ！」

「……っ!？」

鷗外さんはなにを思ったのか、突然私の手の甲にキスをした。

ガタン、と音を立てて春草さんが立ち上がる。

「な……なにしてるんですか、鷗外さん……？」

「なんだ、騒がしい」

「なにしてるのか聞いてるんです」

「ん？ これは西洋風のあいさつだ。ただのあいさつなのだから目くじらを立てる必要もあるまい？」

鷗外さんは愉快そうに答えた。

対する春草さんは、それはそれは深い皺を眉間に刻んでいる。

(なんだか、ますます春草さんの機嫌が……)

夕食が終わったあと、私は不機嫌オーラをただよわせている春草さんの部屋を訪れた。

「あの、春草さん……もしかして怒ってます？」

「べつに」

春草さんは絵筆を紙にすべらせながら、そっけなく答える。

そうは言いながらも、どこからどう見ても怒ってるようにしか思えない。

私は机に向かっていている春草さんのそばへと、静かに近寄った。

(……あ)

ふと目についたのは、壁にかけられた掛け軸だった。

柏の木の幹に、澄ました顔でちよつこりと座る黒猫の絵。

金の両目と長い尻尾。

(やっぱり帰って来てくれたんだ)

ほっと胸を撫で下ろす私を、春草さんはじろりと見やった。

「……前々から思ってたけど、君ってさ」

「はい？」

「食べ物をごちそうしてくれる人に弱いよね。とくに牛肉」

「な、なんですか急に」

「どうせ君は、俺より牛肉のほうが好きなんだろ」

「そういう比較の仕方はどうかと……」

「なに。違うの」

春草さんは筆を置き、ドアの近くにいる私のほうへとやって来た。

（春草さん、拗ねてる？）

いつもクールな春草さんが、変化球ではなくまっすぐな球を投げってくる。なんだか新鮮な反応だ。

「私は……」

（もちろん、春草さんのことが好きに決まってる）

口に出すのはばかられるほど照れくさい答え。

この気持ちを素直に認めてもいいものか、今でも多少の迷いはあった。

——カーテンの隙間から、いびつな月が見える。

もう現代には帰れないと思うと、悲しくなるのと同時に、ほんのわずかな安堵の気持ちも湧いてくる。

家族や友達とも、もう2度と会えないのに。

（私は本当に帰りたかったの？ それとも……）
今すぐに、はつきりとした答えは出ないけど。

「……春草さん」

「なに」

春草さんは私の髪を指で梳き、頬に触れた。

「私……ここにいてもいいんでしょうか」

「ここって？」

「春草さんの隣です」

私の言葉に、春草さんは少しだけ口角を上げる。

「そう頼んでるのは、俺のほうなんだけど」

「え……？」

「言っただろ。君のそばにいたいって。……もう忘れたの？ ひどい奴」

囁きながら、ふわりと私を抱きしめた。

「ねえ。今度の展覧会が終わったら……君を連れて行きたいところがあるんだ」

私が首を傾げると、彼は意味深な笑みで答える。

「今はまだ言えない。展覧会が終わったら話すから、俺について来てくれる？」

もちろん断る理由なんてなかった。

春草さんが願ってくれるなら私は応えたい。

この人の温かい手に、できることならずっと触れられていたい。

「私を、連れて行ってください」

「本当にいいの？ 2度と帰してあげないかもしれないのに？」

（それでもいい。春草さんと一緒なら）

私が頷くと、彼は優しいキスを何度もくり返した。

耳に、頬に、額に、鼻先に……そして唇に。

淡い口づけは、たしかな炎を私のなかにともす。

「君はもう、なにも思い出さなくていい。過去のこと家族のこと……足りない物は、すべて俺があげる。……だからずっと、ここにいてよ」

懇願するような声音が耳に流れ込んできて、私はかすかに身を震わせた。

ここにいたい。

いつかすべての記憶を取り戻した時、果てしのない後悔で苦しむことになったとしても。

「君のことが好きだ。自分でも驚くくらい」

「春草さん……」

「やっと、つかまえた」

鼓膜に届く甘やかな吐息。

（——どうか、つかまえたまままでいて）

深くなる口づけのなかで、私は強く、そう願った。

「おや、荷物はそれだけかい？」

「はい。大きな荷物は先に積み込んでおきましたので」

「そうか。なにせアメリカから欧州を1年以上かけて回るのだものなあ。旅の準備だけでも大騒動だ」

人でごった返す新橋ステーション。

私と春草さんは今日、アメリカへと旅立つ。

海外で展覧会を開く春草さんとその仲間たち。

そこに私も同行させてもらうことになったのだった。

最初に『アメリカに行くからついてきて』と告げられた時、もちろんまったく動揺しなかったわけじゃない。

現代のアメリカではなく、明治のアメリカだ。

どんな生活が待っているのか、不安にならないほうがおかしい。

けれど、私は決めた。

春草さんを信じて、どこまでもついて行くと。

「新橋ステーションから鉄道で横浜に着いてしまえば、あとは船に乗るだけです。むしろ問題はそこから先かと……」

「ふむ。天気や海流の状況にも寄るが、20日間前後でアメリカに着けば御の字といったところか」

「まあ、めったにない船旅だ。本でも読みながらのんびりと楽しめばいい」

「……ところで子リスちゃん。おまえは船に乗ったことはあるのかい？」

「ええと……」

おぼろげな記憶をたぐり寄せ、私は答えた。

「たぶん、河口湖でスワンボートに乗ったことなら……」

「すわんぼーと……。はて、聞いたことのない船だ」

鷗外さんと春草さんは首を傾げる。

当然のように、明治時代にスワンボートはないようだ。

「……まあ、乗船経験があるのならさほど心配する必要もなからう。しかし、居候が2人もいなくなると我が家も寂しくなるなあ……」

ため息交じりの鷗外さんの声。

寂しいのは私も同じだ。

このまま会えなくなるわけじゃないのに、どうにもこの場を離れがたい。

けれど感傷に浸る私とは対照的に、春草さんはいつもの調子で言い放った。

「ようやく静かな環境が手に入ります。執筆活動もますますはかどるじゃないですか」

「はあ……編集者のようなことを言うんじゃない。まったく」

その時、出発を告げる汽笛が鳴った。

「おや、もう発車の時刻か。それでは2人とも、アメリカでも仲むつまじく暮らすのだよ。子リスちゃん、春草に嫌気が差したらいつでも僕のところへ帰ってくるように」

「……鴉外さん？」

春草さんの頬がびくびくと引きつる。

「はは、冗談だ。では、達者で」

この2人の関係は、別れ際ですら変わることはないようだ。

春草さんは肩の力を抜き、そこで初めて、寂しそうに目を細めた。

「鴉外さんもお元気で。……向こうで手紙、書きますから」

「ああ。楽しみにしているよ」

汽車に乗り込み、窓を開けて鴉外さんに手を振る。

車輪がゆっくりと回り始め、徐々に速度を上げる。

鴉外さんが……私たちをあたたかく見守ってくれていた大切な人の姿が、どんどん小さくなっていく。

「はあ……。あの人と離れて暮らすことになるなんて、なんだか実感が湧かないな……」
(そうだよね……)

春草さんは、私よりももっと長い時間を鴉外さんと過ごした。

寂しくないはずがない。

「……君はどう？ 鷗外さんと離れて、寂しい？」

「もちろん、寂しいです」

迷うことなく答えると、春草さんは苦笑した。

「……相変わらず正直だな、君は。まあ正直なところ、俺も少し寂しい気はする。あの屋敷での下宿生活は、今思うとなかなか楽しかった。……鷗外さんが鹿鳴館で君を拾ってきた時はどうしようかと思ったけど」

「私のこと、そんなに迷惑だったんですか？」

「ふっ、そうだね」

「……春草さんこそ正直ですね」

「最初は、そう思ったんだ。君のこと、迷惑でわずらわしい女だって。でも今は……」
「っ……」

後ろから包み込まれるように、抱きしめられた。

「……今は、迷惑だなんて思ってない。迷惑だったらアメリカなんか連れていくわけがないだろ」

耳たぶに触れる春草さんの唇がくすぐったくて、心地いい。

まさか、春草さんの腕の中が一番の安らげる場所になる日が来るなんて、出会った頃

は思いもしなかった。

「俺の言うこと、信じられない？」

「……信じてます。もちろん」

「ふん。どうかな。やっぱり鷗外さんのところに戻りたいなんて思ってるんじゃないの」

「い、意地悪言わないでください」

「俺が君に対して意地悪なのは、今に始まったことじゃないだろ」

「そうですね……」

「……俺はどうやら、好きな子に対してだけ意地悪をしたくなるらしい。そういう奇特な趣味の持ち主だったってこと、君に出会って初めて気づかされた」

くすくすと笑いながら、その唇を私の耳元に密着させる。

「……だから、これから一生かけてじっくり意地悪してあげる」

「しゅ、春草さん……」

驚いて腕をすり抜けようとした私を、強い力が引き止めた。

いつも繊細に絵筆を操るその腕からは考えられないほど強い力だ。

「……君が嫌だと言っても、逃がすつもりはないよ。どのみち海を渡ってしまえば、君に逃げ場はないからね」

「やっぱり、意地悪……」

「でも、そういう男を好きになったのは君だろ？」

まったくもって事実だから、なにも言い返せないのが悔しい。

私の無言を肯定だと受け取ったのか、春草さんは笑い混じりに囁いた。

「だったらここは我慢しなきゃ。もう引き返すことはできないんだから。……さあ、こっちを向いて」

「ん……！」

振り返った途端に奪われた唇。

春草さんは人目もはばからず、私に深く熱いキスを浴びせた。

「しゅ、春草さん、人に見られちゃいます」

「これぐらいで恥ずかしがってどうするの。西洋では、人前で口づけをするのが当たり前前の光景だと聞いたけど」

「でも、ここはまだ日本ですから」

「駄目。郷に入っては郷に従えと言うし、今から慣れておかなきゃ……」
「ん……」

再び押し付けられた唇。

車輪の音と、石炭の匂い。

「……ほら、だんだん慣れてきただろ」

「……………」

「そう……………上手くなってきた。君、なんだかんだで素直だよ。そういうところが、ずっと好きだった。……………って言ったら驚く？」

「……………」

告白めいた言葉に目を丸くする私に、春草さんは満足げな笑みを浮かべる。

「……………ふふっ、ほら、本当に素直だ。日本でもアメリカでも、どこにいても。これからもずっと……………好きでいるから。ずっとね……………」

重ねられた唇の熱さに、私は身を委ねる。

口づけをされている間、私は意識の片隅でずっと汽車の音を聞いていた。

それは、私たちを未来へと運んでくれる、幸せの音――。

）FIN（